

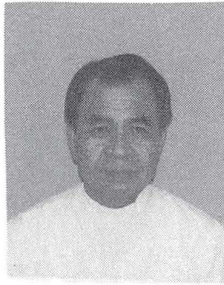
特別寄稿

千里山会編集部より。昨年四月福知山線重大事故に際し、負傷者の緊急受け入れに地元病院経営者としてその任に当たられた吉田静雄氏（十四回生）に、一周年を機に当時の模様のご寄稿をお願いしましたところ、貴重な記録を頂戴することができ感謝申し上げます。発刊が遅れましたことお詫び申し上げます。

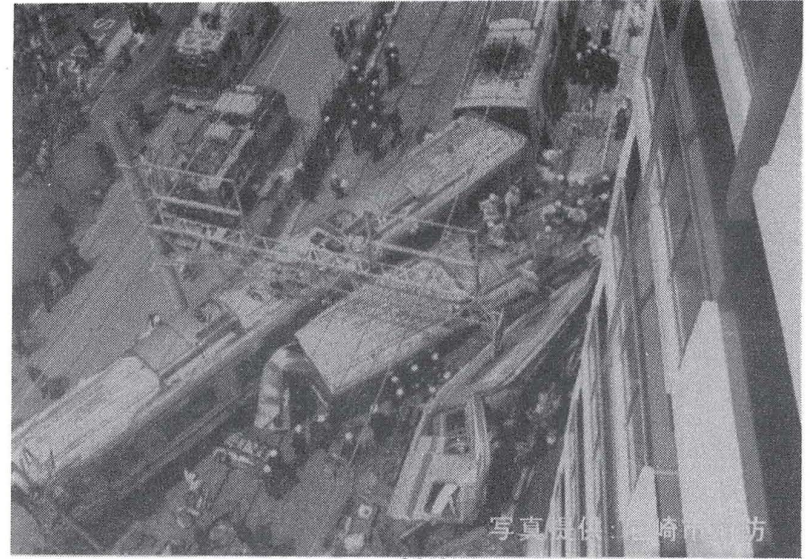
J R 福知山線脱線事故

十四回生 吉田 静雄

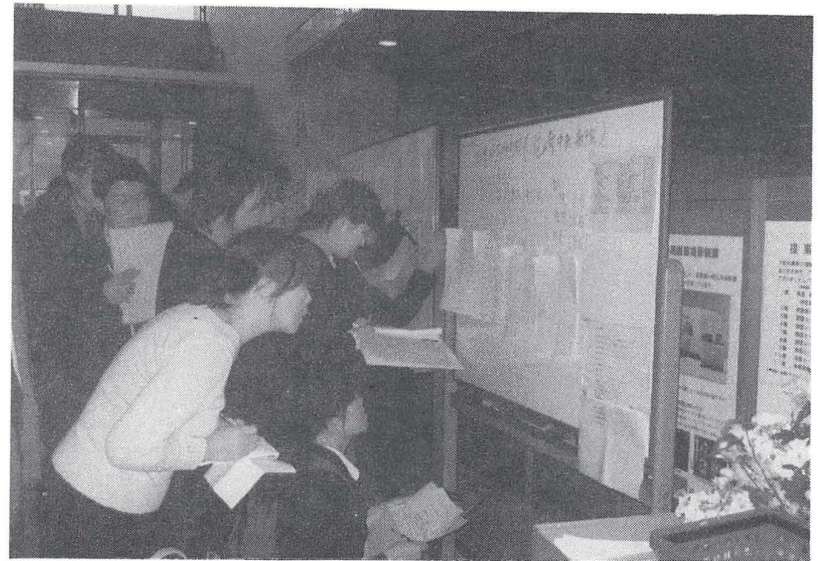
（尼崎中央病院 理事長）



平成十七年四月二五日に発生したJR福知山線脱線事故は乗客五八〇人中、死者一〇七人、負傷者五四九人（重症者一三九人）という我が国列車事故では最大規模のものであった。阪神大震災の教訓もあり、民間人の活躍が目立った。



写真提供：尼崎市 方
最寄りの事故現場



掲示板を見入る家族達。掲示板には受け入れ負傷者全員と入院患者氏名、転送先病院名、他から来た入院患者氏名

尼崎中央病院 現場からの報告

事務職員：…当日受付会計を担当しておりました。事故発生時刻、救急医療情報システムを管理するコンピュータが今までに耳にしたことがない音でピーピーと鳴り出した。

電話担当事務員：…九時二〇分頃どこかのテレビ局より、救急で運ばれた負傷者はきていますかとの問い合わせの電話があり、受付の様子がまったく分からないため、一旦電話を切る。

その後NHKやテレビ局、新聞各社から続々問い合わせの電話が入ってきたため、一階受付に上がってくと、すでにロビーは患者、負傷者であふれていた。

指示に従い地下の事務所に鍵を掛け全員一階受付に上がってきて対応した。

医事係長：…緊急アラームが鳴っていると一階受付から連絡があり、地下事務所より一階に上がっていくとパソコンは受け入れ可能人数の確認を表示しており、直ちに外来看護長にそれを確認するように指示する。

その後すぐに負傷者四名が乗用車にて来院、一人は歩行困難なため、車椅子を用意する。医事課スタッフ

に緊急用に応急カルテ作成を指示する。時間をおかず
に約五〇名程の負傷者が自家用乗用車や、ミニバン、
トラックなどにて搬送されてきた。

地下事務所を閉鎖し、医事課職員全員で、受付を手
伝うように指示する。応急カルテ作成は患者の氏名、
生年月日、住所を確認して作成した。時間が経つにつ
れて重傷者の搬送が多くなり、ストレッチャーが足り
ず、会議室のテーブルを利用して診察室に負傷者を運
んだ。運搬に使われた電車の座席も利用した。警察、
報道関係者の問い合わせが殺到し、対応に追われた。

看護部、外来部門：：事故発生との連絡を受け、その対
応をするかしないかのうちに既に救急患者の搬入が始
まっており、当初、外科、整形外科、救急外来で対応
したが対応しきれず、事故の大きさがわかり、看護部
長の指示で病棟より、応援の看護師、介護職員が下り
てきた。

病棟看護長：：看護部長の指示で外来に看護師〇名の
応援を出す。休暇中の看護師五名が自発的に応援出勤
してきた。次々に運ばれてくる負傷者の処置を、応
援ナースとともに担当を決めて行った。

空きベッドがない状態で運ばれてきた患者は、スト

レッチャーの上で、ホールでしばらく待機してもらっ
た。入院患者はホールに出ないように依頼する。当日
退院される患者は納得していただいた上で早く退院し
ていただいた。

ストレッチャーには名前と負傷部位を記入して貼り
付け、リストバンドを装着した。外科処置の終了した
人たちから、内科医による総合診察を受け、転院の判
断をもらった。五人中二人が重症となり緊急手術
が必要なため三次救急病院に転院してもらう。一人は
当院にて緊急手術となる。入院負傷者家族への連絡と
家族が来るまで出来るだけ一人にせず、心のケアに努
めた。

併設老人保健施設、在宅介護支援センター看護師

ローランド（老人保健施設）のエレベーター利用者
のため入浴を中止し、一階の応援に駆けつける。四階
より椅子やテーブルの運搬、負傷者の介助、水分補給、
オムツやバスタオルなどの提供をする。

病院よりの報告

福知山線の事故で負傷者三〇名、受け入れ可能の人

数はとの問い合わせがあり、対応を検討し始めている
うちに次々と負傷者が民間の乗用車、トラックやミニ
バンで運ばれてきた。

直ちに緊急用の受付をつくり応急カルテにより、負
傷者の把握、*トリアージ方式により、重傷者より点
滴輸液を行い、治療を開始した。一般外来患者様には、
電車事故により多数の負傷者が来られますのでご協力
をお願いしますと何回も院内放送を行った。初診患者
以外の方で帰られた方はかなりおられた様である。

一般、CT等のレントゲン検査は混雑を極めたが、
この方式で順番に撮影を行った。重症で時間が待ちき
れない人はそのまま他の病院に転送してもらった。病
棟のエレベーターは一部使用を禁止して、負傷者優先
とした。阪神淡路大震災の教訓が生きた為か、それ程
大きなトラブルは起きなかった。

当日病院で受付けたのは九七名、実際は一〇〇名を
越す負傷者が来院していたと考えられる。入院は十二
名、入院後他病院に転送四名を含めて転送者は二〇名
であった。

救急受付の後方掲示板に受け入れ負傷者全員と入院
患者の氏名、転送先病院名、更に、他病院、救命セン

ターから送られてきた負傷者、入院患者の氏名も掲示
した。個人保護法のこと考えたが、安否を尋ねて来
院された多数の身内や知人、友人の方々にとって、こ
の判断はよかったのではないかと思う。多くのテレビ、
マスコミ関係者の方々の評判も悪くは無かったようであ
る。

*印：トリアージ方式 災害などで多数の負傷者が出
たとき治療の優先順位を示す識別票を付ける。

医師看護師等の確保について

当院医師二三名 看護師 約三〇名、その他職員三〇
名以上が負傷者の診療、搬送に係った。

他の施設からの応援

大阪中河内救急救命センターより 医師四名、看護
師二名、救命士二名

赤穂市民病院より 医師一名看護師二名、他二名

他に大阪より友人医師一名、当院退職看護師二名

重傷者は 肋骨多発骨折、下腿骨折（開放骨折）、骨盤
骨折、肺挫傷、頭部顔面挫創等が多かった。 開放性
骨折の一例は手術室で手術を行った。

無料電話の設置：十一時三〇分頃、NTTより災

害用の無料の電話四台が設置された。

振り返ってみてよかつたと思えることは、外科系、内科系を問わず、全診療科の医師、看護師、その他の職員が一致協力できたこと、震災の教訓もあり、救急受付から情報開示がスムーズに行えたこと、患者の協力も得られそれ程大きなトラブルも無かつたこと。搬送の遅れなどによる死亡者が一人も無かつたことなどがある。時期的にも春先で病棟患者が満床ではなく余裕があつたこと、夜間でなく人手の多い午前中であつたことなども幸いしたと思う。また大阪や兵庫の救命センターからドクターカーによる応援にきていただけ事は非常に助けられた。

大事故や大災害時の応援は出来るだけ早く（出来れば最初の一〜二時間）に応援が最も必要と考えられる。救急指定病院として今後考えられる事は、医療法上は認められないが、予備のベッドは常時数床認められなくても良いと考えられる。ストレッチャー、担架なども何台か予備が必要。レントゲン技師、検査技師、は当直制にするべきであろう。普段から大事故、大災害を想定した心構えと訓練が必要である。

平成十八年三月二二日

吉田静雄氏 略歴

千里第二小学校卒 大阪府立
浪速高等学校尋常科高等科卒
大阪大学医学部卒 米国留学
右医学部外科学第一教室勤務
大阪労災病院 第二外科部長
大阪厚生年金病院 外科部長
医療法人中央会 尼崎中央病院 理事長

